

工藤進英

昭和大学
医学部教授

見えない
がんを追う

大腸内視鏡が拓く医療フロンティア

新潮社

あとがき

挑戦する人は、結果はともあれ、必ず何か真実に近いことを知ることができます。

わたしの医療人生は、ことごとくチャレンジの連続でした。今思うと、その過程をむしろ楽しんでいたのかも知れません。大変に困難なことの連続でしたが、こうあれば良いなあ、と心から思うことが少しずつ遅れて現実になってきました。夢が実現することは、偶然か運が良かったのかわかりませんが、結局、夢はことごとく成しとげられてきました。三十年間の継続の賜です。しかし、周囲を見れば、世の中の矛盾点や理不尽なあり方が次々と見えてきます。わたし自身の医療へのチャレンジはこれからも続くでしょう。「幻のがん」を発見してしまったから。

わたしはふだん専門書や学術雑誌で専門家を対象にした原稿をたくさん書いています。しかし「一般向け」である本書がどれだけ皆さんのお役に立つように仕上がったか、改めて本書全体に眼を通してみると忸怩たるものがあります。中にはわたしの歩んできた道を過度に描写したところもあります。一般の方々の知識としては少し不必要かと思える箇所もあります。なるべく平易に書いたつもりですが、どうしても専門用語で解説せざるをえないところがあります。

しかし、増加している大腸がんの危険性について警鐘を鳴らし、「四十歳以上の方々はどうか大腸内視鏡検査を受けて頂きたい」というわたしの切なる願いはきつと皆様方に届いたものと思じます。また、その願いを皆様に到達させるためには、多少記載が専門的にならざるを得なかった点はご容赦願いたいと思います。

最近テレビや新聞などへの出演・執筆依頼が相次いでいます。勤務先の昭和大学横浜市北部病院消化器センターの診療実際や業績が全国的に注目を集めているという直接的な理由もあるでしょうが、大腸がんをはじめ消化器がん・がん死の増加という背景があるかと思えます。徒に読者の方々の間に不安を煽るつもりはまったくありません。しかし病気の実態をなるべく知ったうえで対処することはとても大事なことです。症状が出る前に内視鏡検診を受けることにより、大腸がんで死亡する人をほとんどなくすることが出来るのです。この点をマスコミ界が認識し始めたことにマスコミ出演の機会が増えた理由があるかと思えます。わたし自身、病院や日本・世界各地での多忙な診療の合間であっても、これらの要望になるべく応えていきたいと思っております。

本文に記載した方々を含めて、三十五年のわたしの大腸がん診療で忘れえない教示を賜った先生方が多数おられます。そのお名前を以下に記載し、この拙い本書を捧げさせて頂きます。

前新潟大学第一外科学教授・武藤輝一先生、曾我淳先生、前第一病理教授・渡辺英伸先生、秋田赤十字病院前院長・故竹本吉夫先生、同現院長・宮下正弘先生、元早期胃癌検診協会理事長・故白壁彦夫先生、元東京医科歯科大学第一病理学教授・中村恭一先生、前国立がんセンター東病院院長・吉田茂昭先生、前日本消化器内視鏡学会理事長・丹羽寛文先生、昭和大学小口勝司理事長、同細山田明義学長、同前横浜市北部病院院長・黒川高秀先生、同現院長・田口進先生、藤井クリニック・藤井隆広先生、田村クリニック・田村智先生。

なお本書出版にあたっては、医局員諸氏、なかでも荻原足穂さん、宮地英行君の助力を得ました。感謝致します。

最後に本書の企画・編集でお世話頂いた新潮社の風元正氏、他出版部の皆様に厚くお礼を申し上げます。

二〇〇九年八月二十七日

工藤進英